地域史の研究と文書館 —歴史史料の電子情報化に絡んで—

Archives and the Study of Regional History

渡辺 英夫
Watanabe Hideo

はじめに

本稿で言う文書館は、歴史を伝える文書史料を収蔵し、利用者に公開しつつ保存・活用についての研究を進める機関の総称である。全史料協は、それらが全国規模で結集した連絡協議会で、この会が取り組んできた一連の運動を、ここでは文書館運動ないし文書館活動と呼びたい。そこではまず、それに主体的に関わりうる人たちの間での議論があり、また、文書館の機能と存在意義を主張する立場から、行政に向けて、また既存の歴史学界に向けても発言され議論が重ねられてきた。いま文書館が、それぞれの地域社会の中で自らの有用性を主張し、提示してみせる必要性に迫られているとき、もう一つ、利用者の立場からする文書館論があってもいいのではないかと思う。史料の利用と、保存・管理が常に対立するとは限らない。文書館を取り巻く世界は、利用者の目にどのように映るのか、この考察が文書館活動の一層の進展につながればと考える。

1 地域的偏差

ある自治体史の編纂現場では、今だに古文書がゼロックスコピーにかけられている。その県の公文書館では、マイクロフィルムからの紙焼き版と共に、かつて開館前に作られた原文書のゼロックス版が同列に開架利用されている。市町村史の編纂担当者が、それらを

閲覧利用していく。再コピーも許されているので便利だと思う。何の説明もなしに、コピー版もマイクロ版も一緒に並べられているので、一般利用者には便利さばかりに目がいつて、そこに原文書保護に対する質的な差異があることに気付かない。それが繰り返されると、やむを得ずゼロックスコピー版を利用しているということにはならない。むしろ推奨していると誤解されても不思議ではない。

原物コピーを平然と繰り返す編纂現場に、マイクロフィルムの利用を勧めてみても、話しが噛み合わない。担当者にしてみれば、自分たちは原物を傷めないよう、コピー版で仕事をしているとの思いが強い。原文書は大切に所蔵者にお返しした、という。勿論、編纂室が定期的に所蔵者宅を訪れ、防虫剤の交換や虫干しのアドバイスをすることなどない。アフターケアの必要性など気付いていない¹⁾。文書館界で議論されている事柄が全く伝わっていないのである。自治体史の編纂が本づくりで終わってしまう典型的な例と言える。これに類したことは、おそらく他にもあるのではないだろうか。

文書館がアーカイブズライブラリーを充実させ、職員の研究利用と、一般利用者へ提供することは、今ではどこでも行なわれている当然のことと思われるかもしれない。しかし、現実はずしもそうとは限らない。ある県の公文書館では、これらライブラリーの一切が閉架にしまい込まれている。勿論、受贈目録などありはしない。カウンターで、ある雑誌

を見せてもらいたい旨口頭で依頼すると、探し出して閲覧させてくれる。だが、コピーは駄目だという。たとえば、「何々市史研究」に掲載されているある論文をコピーして読もうと思っても、それが許されないのである。メモを取るなり、筆写するしかない。今時、信じられないことがここでは強要されている。活字に印刷された刊行物であろうとも、その県にとっては一冊だけ寄贈を受けた大切な原本なので、原本保護の理由からコピーは不可なのだという。文書館職員は、あちこちの文書館を自分の研究目的で調べ歩く経験をしたことがないのか、と疑いたくなる。ごく最近、全史料協の全国大会を開催した県において、この認識なのである。寄贈者側では、寄贈刊行物がこのように死蔵されていることを承知しているのであろうか。

こうしたことは一般に館の要綱などで定められている場合が多い。個々の職員の対応に不同が無いよう、館の内規・職員の内部マニュアルで決めているのである。このレベルで決められているものに、史料閲覧願いや複写許可申請書などの書式がある。一回に5点なり10点なりの出納の条件は理解できるようにして、何故、その申請書一枚毎に住所・氏名、場合によっては職業や電話番号・勤務先名まで書かねばならないのか。あの申請書は、その後、どのようなライフサイクルを辿るのであろうか。利用者にあれだけの時間を費やさせておいて、後は廃棄されるだけの運命にあるのか。仮に、それを基に後日マイクロフィルム化を図る際の参考資料にするにしても、年間に何千件もあるであろう申請事項をチェックしデータ化するのは、労力の無駄ではないか。そのようなことに頼らなければマイクロ化の優先順位が決められないのだろうか。申請書への記入事項は必要最少限に止めてもらいたい。史料名は記さずとも、記号・番号だけでよいか、閲覧・複写の申請書は一枚にまとめ、複写希望のものに何か印を付ければ済むような工夫があってもいいと思う。

ここで言いたいのは、このような文書館利

用の実際が、職員の内部マニュアルで定められていて、利用者の側から、その変更・改善を求める手だてが保証されていない点にある。結局は、職員同士の内部的な取り決めなので、カウンターでその旨を担当者に訴えるしかない。その声を聞く聞かないは、担当者の胸一つにかかっている。つまり、利用者が自ら育っていくしかない。説得力ある形で要望を繰り返すしかないのである。そして現実には、その人数も増えていかなければ文書館は上手く機能していかない。史料管理者の方々には、自らも一般利用者として他館を利用されるよう望みたい。利用者側の不便に気付かず、職務上は当然と思われていた事柄でも、実は改善可能なものが見えてくるかもしれない。

地方の文書館運動や史料保存、自治体史編纂の現場には、熱意は旺盛だが、一昔も二昔も前のスタイルで取り組んでいる所がある。そこには、情報が途絶しているかのようだ。文書館界の常識が見えていない。史料保存運動や文書館運動の蓄積の中にあれば、今かかえている課題やこれまでに勝ち取られてきた成果が日常的に語り合われているのだと思う。そこには、緊密な情報交流の輪ができていて、その情報を地方にも伝えてほしい。地方には、文書館に関わりを持てる絶対数が圧倒的に少ないのである。道や県の文書館利用者が市町村レベルの史料管理者になることが多い。この連鎖の輪を広げ強める役割を全史料協に期待したい。

文書館先進地帯と地方の現実には、益々その格差が広がっていくように感じる。文書館界は業界になってはいけない。全史料協は、この地域的偏差の進展に目を向けるべきである。自治体に文書史料の担当部所があればまだいい。問題なのは、それが無く、これから行政に働きかけていかなければならない時である。ある地域に全史料協への入会資格を持つ人がほとんどいないという事態があり得る。入会せずとも「記録と史料」を定期購読する方法があるではないか、と思われるかも

しれない。しかし、そんな専門誌があるということ自体が知られていないのである。大会テーマに文書館制度の普及を掲げるのであれば、このような地域的偏差のあることを真剣に考えるべきだと思う。

2 情報の公開

その筋の専門誌の一つに「市町村史の研究」や「研究紀要」など自治体が発行する逐次刊行物がある。ここには、歴史学の個別研究だけでなく、史料保存の技術論、文書館の機能や機構、社会的役割、自治体史編纂との関係など実態に即応した議論と情報が満載されている。アーカイブズライブラリーそのものである。史料保存や文書館運動に積極的に取り組んでいる自治体では、これらライブラリーを自ら発行して情報を発信し、また、それを集めライブラリーを充実させている。そうした所ではどこでも、書庫の一角にこれらが集められ、職員の研究利用と一般閲覧の利用に供されている。発行主体の側では、公費を使って公刊された逐次刊行物が、広く公開利用されていると信じて疑わない。しかし実は、これほど入手困難な刊行物はない。

身近な市町村に、これらが揃っていれば別だが、そうとばかりは限らない。どこの自治体史編纂事業にも関わっていない歴史研究者は、大学や県立の図書館でそこに寄贈されているもの以外、手にとって見ることはできない。それも県内市町村と、都道府県レベルで発行するものの一部にしか過ぎない。どこでもその状況に変わりはないだろう。発送する市町村の側でも全国規模の範囲で寄贈しているとは思えない。一般論として自治体の発行する逐次刊行物を手にとって見ることは難しい、限定されていると言って誤りない。

ある県の文書館では県内の市町村が発行している自治体史の本編、編集史料集、史料目録、研究紀要などが、その時点で何号まで発行されているかをまとめ、一覧表に整理している。依頼に応じて、その表を郵送してくれ

る。ありがたいサービスで、各都道府県でも是非取り組んでいただきたい。だが、逐次刊行物に掲載されている論文名まではわからない。ところが、埼玉県地域史料保存活用連絡協議会編の『埼玉縣市町村歴史関係文献目録』（1996年3月）によれば、逐次刊行物の目次内容まで知ることができる。この種のものは、かつて、都道府県立図書館が十年分ぐらいつつをまとめ、郷土資料目録として刊行していたかと思う。最近少ないように思うが、継続を望みたい。そして、都道府県レベルの文書館でもこの種の情報を収集し、提供していただきたい。のみならず、原物を手に取って見られるよう、環境を整備してもらいたい。これまで図書館の郷土資料コーナーが担ってきた役割は、文書館にも欠かせないと思う。

文書館活動の蓄積がない場合、その専門的な情報を収集するのはそう簡単なことではない。文書館制度の普及を図る上でこの点を見逃すことはできない。アーカイブズ関連の論文を読む場合、それが文書館にあれば、すぐに調べられる。もし無ければ、図書館のレファレンスコーナーから相互利用の制度を利用してコピーを取り寄せることになる。しかし、図書館のコンピューターネットワークは、基本的に雑誌なり本なりが、どこに所蔵されているかを教えてくれるシステムなので、雑誌や本の目次内容までは入力されていない。従って、その論文を掲載している雑誌の所在を確認できても、その雑誌がどのような論文を収録しているかはわからない。その意味で、先の『埼玉縣市町村歴史関係文献目録』のようなものが都道府県ごとに整っていればありがたい。普通は、ある論文のコピーを依頼した時に、それと同じ雑誌にもう一本関連深い論文が掲載されていたとしても、それがわからない。掲載誌の目次も一緒に送ってもらい、それを確認してから再度依頼することになる。非効率この上ない。歴史学の個別研究にはよくある風景である。

全史料協関東部会編の『文書館学文献目録』（岩田書店、1995年刊）は、古いものから最

新のものまでアーカイブズ全般にわたって膨大な情報を提供してくれる。これを見て、是非読んでみたいと思う論文が、ある雑誌に掲載されていることがわかったとする。ならば、その雑誌の他の号にも関連の論文があるのではないかと考えてしまう。だが、その雑誌が身近にあればすぐ調べられるにしても、大体は無いのが普通である。すると、それを調べるには大変な労力がある。しかし、それでいいのだろうか。研究者は、いつもやっている、やらされていることだが、それを自治体の史料管理者に求めていいのかと思う。特に、これから史料保存や文書館に取り組んでいきたいと考えている自治体の職員には、もっと簡単にこれらの情報を手に入れられる方法を用意すべきではないかと思う。

『文書館学文献目録』の「編集を終えて」に述べられているように、今後、こうしたデータがフロッピーやMO、CD-ROMなどで提供されることを望みたい。そうすれば、それを加工し、執筆者ごとにまとめたり、ある雑誌を選んで刊行年順に並べ替えたりすることも容易にできるようになるだろう。論文コピーを収集する効率が飛躍的によくなる。この点で、文書館活動の普及に果たすコンピューターの役割は大きい。

インターネットももっと活用すべきだと思う。手始めに、各自治体が発行する逐次刊行物を、目次だけでもいい、インターネット上に公開してもらいたい。「市町村史の研究」など自治体が発行する逐次刊行物を創刊号から順に並べてみると、その自治体が行ってきた活動の軌跡を知ることができる。

文部省の学術情報センターでは、インターネットを利用した電子図書館の開設を検討し、歴史部門では「ロシア史研究」が公開されている。利用資格に制限があるなど問題はあるが、参考になる点も多い。執筆者個人が自分のホームページに論文や文献目録など様々な情報を流すのとは意味が違って、「市町村史の研究」など自治体が公費を使って公開した逐次刊行物こそインターネットにのせ

て相応しい。大学の研究所などでも、研究紀要に掲載された論文をネット上に公開する所が出始めている²⁾。データが年々追加されていくという逐次刊行物の性格から言って、紙メディアで公刊してだけでなく、その目次だけでもパソコンの共用データベース形式で提供していく方が適している。掲載論文へのヒット率は格段に高められる。「市町村史の研究」も真の意味で公開に近づいていく。それも、市町村個々のホームページではなく、都道府県毎になされるべきで、さらに全史料協は、そのセンターになりうるのではないかと³⁾。料金や法制上の問題点など検討すべき時期に来ていると思う。

3 未来の歴史史料

歴史の研究者は、文書ならとにかく何でも残しておいた方がよいと考える。行政文書でも企業資料でも、できるだけたくさん残しておいてほしいという願望がある。残された文書から過去を再考していくしかない者の性なのかもしれない。しかしそれは、間違っている。膨大な文書のすべてを残すことなど物理的にも経費面でも非現実的だし、仮にそれができたとしても、将来それに見合うだけの歴史学の成果があがるものでもない。現に今残されている古文書は、偶然残ったものもあるかもしれないが、大半は、後世に伝えようという意思が働いた結果なのだから。現代の文書についても選別すべきは選別し、必要なものを伝えていくべきだと思う。しかし、今の技術ならば、紙メディアとしての文書は破棄するにしても、媒介を変換することによって、大量の文字情報を省スペースの中に残していけるのではないか。

史料保存に関する科学技術は急速な進歩を遂げている。史料の保存環境をめぐる、温湿度、光、煙、薫蒸など、古典的な研究蓄積があるし、リーフキャストの技術や中性紙の保護紙も常識化しつつある。また、阪神淡路大震災の史料救出に関わる様々な活動

から、紙史料に限らず写真やネガなども含めて損傷した史料を修復する技術も、知られるようになってきた。96年の全史料協秋田大会の分科会でも、そうした報告があり、参考文献が示された。しかし、いざ保存の現場に立ち会わされたとき、私たちはどれだけ正確な知識を持ち合わせていると言えるだろうか。自分でできるということではなく、技術力のある業者に、どれだけ的確な指示を出せるのか、ということである。

たとえば、ゼロックスコピーはよくないといながら、一回のコピーで文書がどれくらいの損傷を受けるのか、科学的なデータを私は知らない。何回もはよくないにしても、一回だけならいいだろうと言われたときに、答えに窮してしまう。また、マイクロフィルムは市販のネガ版でも一般に言われるほど万全なのだろうか。だとしても、彩色は伝えられないし、朱の中間色や白字のことなど、文書館界ではどのように考えられているのだろうか。

そして、デジタル信号はそれほど信用できないものなのか。企業では、大概の場面でコンピューターが使われ、現場での処理は言うまでもなく、膨大なデータがコンピューターに蓄積され、経営戦略に活かされている。年々基本データも追加・更新されていく。紙メディアで作成された文書や図面を、マイクロフィルムで保存しておくことは多くの企業でやられてきたことだし、今では光ディスクへの記録も試みられている。ならば、将来の歴史史料に対してもデジタル化は一つの有力な保存の手段になりはしないか。行政文書の永年保管文書は原物を保存するだけでなく、優先してアナログのフィルムに保存し、更にデジタル化しておく。その他の文書は廃棄しなければならないにしても、媒介を変換して文字情報だけでも残すべきものもあるのではないか。その技術はあると思う⁴⁾。そしてその技術は、現代のあらゆる紙史料に活かせるのではないか。

ディスクを動かすドライバーもOSも、

100年後には対応できなくなってしまうだろうと憂えてばかりいてはいけない。おそらく、そうならないための更新技術の開発や、標準化については、文書館界でも既に研究が進められているのだと思う。文書館界にとって、行政を説得する高邁な理論も必要だが、それだけでなく、現実採用しうるものは何なのかを見極められる情報と知識も欠かすことはできないのだから。

文書館制度の普及に当たって、行政が作成した公文書は国民共有の公有財産であるから、行政自らが大切に後世に残していかなければならない、と説かれている。公文書館法を活かし、行政に公文書保存の必要性を説く有効な論理なのかもしれない。しかし、文書館界で言われる公文書概念と、国民レベルの公文書意識には、ズレがある。国民感覚に即して言えば、公務員が、つまり役人が役所の仕事のために役所の中で作っているもの、これが公文書なのである。そこにパブリックの精神を感じ取ることはない。行政文書そのものなのである。そもそも、文書のライフサイクルを考えたとき、作成の出発点において、国民は客体とはなり得ても主体にはなり得ていないのだから、それもやむを得ない。行政の実際から国民は閉め出されているのである。政治を作り出した社会と、その歴史が異なっているとき、文書館制度の先進諸国は参考にはなっても、ダイレクトに輸入するには慎重であるべきだと思う。行政文書を私たちの生活に密着した文書だと感じるにはまだ無理がある。

20世紀を生きる私たちの現実を、果たして行政の永年保管文書だけで伝えられるのだろうか。個人の日記や古い写真、あるいは日々捨てられていく紙の中にも、私たちの日常があるのではないかと、という想いが基本にある。そこに記された文字や図像情報だけでも残しておけないだろうか。文書館は、過去から未来にわたる歴史史料総体の保存機関であらねばならない。文書館の活動は、絶えず史料総体を視野に入れてなされなければならない。

4 史料の公開

現在の整備された文書館環境で史料を撮影するのに何の支障もない。そこで、仮りに文書館所蔵の何々家文書という史料群すべてを撮影したならば、どのように思われるであろうか。その紙焼き版から再コピーすることも可能な筈で、文書館の史料管理者の掌握できない所で複製の複製がどんどん作られていく事態についてである。史料管理者の立場からは、印刷物への無断掲載や、史料内容からのプライバシー問題の発生など、様々な問題が次々と脳裏をかすめるに違いない。

しかし、デメリットばかりではない。たとえば、東大の史料編纂所の史料が、ある県史編纂室のマイクロフィルムに収められた場合などである。市町村史の編纂に当たって、その同じ史料を調べねばならないとき、史料編纂所に連絡すると、マイクロでよければ、県史編纂室のものを利用するよう勧められることがあるのではないだろうか。県史編纂室が文書館に引き継がれば、その公開性は一層高められる。史料編纂所でも出納事務が軽減されるし、何よりも出納による文書の傷みややわらげることができる。マイクロフィルムの普及は、史料の保存にも、歴史学の研究にも多大な貢献をした。しかし、原文書と同じ場所に置かれているだけでなく、もう一本、利用者の身近な場所にそれがあれば、もっと便利になる。

あるいは、阪神淡路大震災は、バックアップ機能の大切さを教えてくれた。企業では、基本データの維持管理機能を、本社ともう一つ別の地点に設ける動きを強めることになった。文書館界でも、原史料を複製保存したマイクロフィルムが、原物と同じ施設に保管されるだけでなく、もう一つ別の場所にも保管しておく必要性について検討すべきではないだろうか。

利用者の我儘を言わせてもらえば、マイクロフィルムがあるならば、オリジナルは大切に保管するにしても、そのコピーマイクロを

貸し出してもらえないかと思う。文化系の研究領域の中で、日本史の特に近世・近代史の研究ほど、非効率的で、体力と時間をかけなければならない分野はない。教育学部の社会科に勤務し、同僚教員には叱られるかもしれないが、正直そう思う。マイクロフィルムの専用保管庫を提唱する文書館の現場からは、到底受け入れ難い話だとはわかっている。貸し出しの期間を短く限定しても温湿度の管理ができないとか、第一、リーダープリンターが無いと話にならない筈だし、そんな人間は全体利用の一部にしか過ぎない。公平利用の観点から、そんなことに予算をかけるべきではない、と退けられるだろう。

だがもし、マイクロフィルムではなくCD-ROMなら、どうだろう。マイクロフィルムからCD-ROMに情報を移し、それを貸し出すのである。利用者はリーダープリンターのある場所に行かなくても、自分のパソコンモニターに史料を呼び出し、プリンターに出力することもできる。秋田県立図書館では秋田県立博物館所蔵の「菅江真澄遊覧記」のCD-Rを作成し、貸し出しサービスを開始した。史料の公開とはそういうことではないかと思う⁵⁾。これによって、今までは思いもよらなかった史料の利用が引き出されるかもしれない。学校教育・社会人教育・生涯学習などでの活用がすぐにも思い浮かぶ。

古文書は読めなくても、古い新聞なら読める。各地の図書館や文書館では、その地方の古い新聞を収蔵している所が多い。たとえばこれをCD-ROM化して、貸し出してあげると、関心もあって興味も引き出し易い。文書館に行かなくても、教室で、あるいは自宅で文書館の史料を読むことができるようになる。そういう形の文書館利用があってもいいのではないか。そういう活動からも、文書館への住民理解は深められていく。文書館は利用者に来てもらうだけの施設ではない。文書館専門職員は、史料保存と史料内容に関する専門職であるべきで、出納事務は軽減されなければならない。来館者の数を数えるのは本

務ではないと思う。色々な形で、新たな利用を引き出していく積極性が必要ではないか⁶⁾。長期的に見て、これを実現するのに悲鳴をあげる程の費用がいるというのか。住民が地域の歴史と史料に親しみ、その伝統を継承していくにはそれぐらいの費用をかける価値があるのだ、と主張すべきだと思う。

5 史料目録

上記のことが実現できれば、私たちの史料撮影もする必要がなくなる。近い将来、そうなることを願いつつ、今は現実に対応しなければならない。史料調査は史料目録の収集から始まる。文書館には館蔵史料の概要をあらわす目録と、史料群ごとの詳細目録の二種類が最低でも必要である。そして、印刷された目録はできるだけ入手しやすい方法をとっておいてもらいたい。販売だけでなく、各地の関連機関への濃密な配布を心懸ける必要がある。目当ての史料群が定まると、目録の分類に従って、撮影リストを作成する。予算と時間が許すなら、史料群すべてを撮りたいという衝動を抑えつつ撮影順序を決める。しかし、目録からは史料内容が判断できない場合もあるし、フィルム数がどれくらいになるかもわからない。分厚い御用留もあれば、薄いものもある。継ぎ紙の文書が何カット分かまでは無理にしても、目録には帳面ものの丁数を載せてくれるとありがたい。一眼レフで済むのかマイクロカメラにするか、事前に判断しやすくなる。

現状では、目録を入手してから一度館を訪ねて文書を実見し、その上で撮影、という手順にならざるを得ない。細かいことを言えば、閲覧願いへの記入には大変な時間がかかるので、目録と一緒にその用紙も手に入れて、予め書き込んでおくようにする。そして、史料を実見してから撮影するものを決め、複写許可申請書の記入にかかる。遠方への調査の場合、これは、旅先の宿に帰ってから夜の作業となる。閲覧願いに書き込んだのと大部分同

じ史料について、記号番号と長々しい史料名をもう一度書かねばならない。そうやって、ようやく撮影にこぎ着ける訳である。目録情報がもう少し親切で、閲覧・複写願いが一枚で済めば、出発前にもっと効率よく作業ができるのだが。文書館の専門職員が目録を作る段階で史料を撮影するのと、目録ができた後の閲覧・撮影とでは、かなり勝手が違うことに気付かれると思う。文書館で史料管理に携わる方々には、自らも利用者として他の文書館に出向かれるよう望みたい。相互に利用しあうことによって、利用者の立場に立った史料管理のスタイルが見えてくるかもしれない。

一般利用者には書庫の状況はわからない。一点ずつ袋に入って並んでいるのか、中には十袋ぐらいまとめて整理箱に入れてあるのか、あるいは虫破損が甚だしく閲覧できないものもあるのか、貴重史料扱いで別置されているのか、閲覧カウンターの外側からは見ることはできない。しかし、史料管理者はそのすべてを熟知している。と言うよりも、どの棚にどういう形で収納すべきかを絶えず考えながら整理が進められ、その結果として目録ができあがる。ここで、別の担当者がその史料群を整理し目録を作ったならば、果たして同じ目録ができるだろうか。おそらく違うと思う。一つの文書がAの分類に入ってもB分類に入ってもおかしくない、しかしAとBは区別した方がよい、ということはいくあることである。したがって、目録作成者の視点に依じて微妙に違った目録ができあがり、史料の配架状況も異なってくる。同様に、利用者各人と目録作成者とは視点が違う。

史料利用に当たっての公平・平等原則というものがあるらしい。文書館の史料管理者が、史料整理・目録作成過程で知り得た知見を基に、一般利用者に先んじて研究論文を発表してはならない。それがマナーだという。しかし、研究を伴わない目録作成などあり得るのだろうか。史料を読み込んで、その史料の意味を判断したからこそ分類ができるのだと思

う。勿論それによって史料の公開が遅れてはならないが、目録作成と同時にその史料を使った研究を発表し、その史料群の持つ意味を原所蔵者と地域住民に示すことも、文書館職員の責務の内ではないかと考える。そうすれば、私たち利用者にとっても、目録作成者の研究を読みながら、目録を見られる訳で、どのような観点からその史料群が分類されていたのかを知る手助けとなる。それとでも、史料群総体にわたった研究はできないだろう。特定の問題関心に支えられた研究にならざるを得ないのが現実ではないか。

近世・近代史の研究は史料の宝探しではない。史料の最初の利用者が、その史料群から引き出しうる論点を最良の形で構成し得るとは限らない。後から批判を受けつつ、研究の質が高められていくのである。史料管理者が目録作成ごとに、それに基づいた個別研究を発表するのは容易なことではないだろう。とはいえ、少なくとも館が目録を作ったような曖昧な態度は避けるべきである。目録はそれ自体が、史料群の性格を第三者に伝えるものであり、その分類は、目録作成者の見識の表明なのだから、作成者名を明記しなければならない。そして、そのように分類したことの意味を研究として公表すべきではないか。

これからは、史料目録も印刷目録と一緒にデータベース形式のフロッピーで提供してもらえと思う。そこには、B5判でもA4判でも書き込み切れないデータを入れることができる。必要があれば、書庫の棚番号・配架状況までも入れられる。何よりも、一つの史料に一つの記号番号しか与えられず、一通りの方法でしか目的の史料を引き出すことができない印刷目録の限界を克服することができる。データベースを使えば、A分類でもありB分類でもある史料に対してどちらからでもアプローチできるようになる。史料群全体を作成年代順に並べ替えることも簡単だし、作成者ごとにまとめて検索することも容易にできる。そして、書庫の配架状況がわかれば、棚の順番に史料を出してもらおうような出納時

の心配りもありえよう。目録の作成にパソコンが威力を発揮している現在、これの実現だけはそう遠くない話だと期待している⁷⁾。

6 歴史教育

過去へのアプローチは文書史料からばかりとは限らない。国語辞典である『広辞苑』のCD-ROM版には映像や音声まで入っているという。形や大きさを持った物を伝えるには画像表現の方がはるかに適している。歴史学の研究に則して言えば、文書史料と「もの」資料の問題になる。近世や近現代史に比べて残存する史料の絶対数が少ない古代史や中世史の研究手法を考えれば理解しやすい。もの資料や民俗学の成果も、あるいは歴史考古学をも視野に入れて考えることが常識となっている。この点は近世以降の分野でも参考になる。

そして、こうした姿勢は研究者の視点と言うより、実は市民感覚に近いものではないだろうか。住民が地域の歴史を考えようとするとき、文書史料ももの資料も民俗行事も区別はないのだと思う。歴史とは、要するに古いもの、古いことなのである。市民にとって古いものごとは、大体において目に見えて視覚的に認識可能な、「もの」や「こと」に触れることによって感得されていく。博物館の展示では、「もの」と文書を密接有効に関連づけながら、市民が理解しやすいように工夫してあるのが普通である。古い文字を読んで、その文字世界から時代を超えた過去に入り込んでいくにはかなりな訓練がいる。「もの」だけでも、また文字だけでも過去は解らないのである。

文書館の企画展では、絵図類が展示されたり、文書に関連のある「もの」を写したパネルを用いたりすることが多い。そこでは、文書だけでは関心を呼びにくいとか、彩色のあるものがほしいとか囁かれる。その通りだと思う。ガラス越しに展示された文書を見て、読んで、そこに記された文字世界から当時の

社会に想いを巡らすことなど、およそ至難のワザと言えよう。その展示を眺めることはあっても、もう一度見に行こうとは思わない。文字情報だけでは伝えきれない歴史情報というものがあるのだ。その意味で、文書館は博物館とネットワークを組んで情報交換を密にしておく必要がある。

地域の歴史を住民の視点から考えたとき、その土地と、そこにあったものと、そこに生きた人間を切り離して考えることはできない。子供たちにふるさとの歴史を教えるとき、教室で学習しただけでは効果があがらない。関心を持たせる意味でも、「もの」を見せ、できれば触れさせなければならない。地域に博物館的なものがあれば、それを利用する。だが、教育の現場はそれほど恵まれてはいない。自治体が博物館を持っても、交通の便と安全の確保、時間割のことなど、解決しなければならない課題は多い。そういう中で、学校の近くにある古い「もの」を見せるとか、お年寄りの話を聞くとか、色々な工夫が試みられる。ところが、そうやって歴史の生の資料に触れさせると、彼らの頭の中には既に教室で教わった「歴史」がインプットされているので、原物はそれを追認するものになってしまう。子供でも大人でも、歴史とは活字に書かれて既に解っていることで、資料や史料を読み解いた結果であるとは考えない。「覚える」ことが歴史の勉強だと思い込んでいる。

学生に歴史のレポートを書かせると、みな、何かの概説書を読んでその要旨をまとめてくる。中には郷土史事典の記述をそのまま写し取ってくる者もいる。歴史上のテーマを調べるとは、それについて書かれた本を読むことだと信じている。大学では、活字になって叙述されている内容は、実は誰かが史料を読み解いた結果なのだ、ということを知らせることから始まる。そんな訓練もしたことのない大多数の学生が教員となって、地域学習の単元で、ふるさとの歴史を「教える」のである。歴史事実を覚えさせようとする方向に目が向

いてしまうのも当然といえよう。本当は、過去を伝える何かが残されているから、過去が解って、新しい資料が発見されれば、その信じられていた過去も訂正されることがあるかもしれない、ということを知ることが基本である筈なのに。

7 地域史の研究

文書館界でも、この点を考えておく必要があると思う。自治体史の編纂事業は、学校教育や社会人教育とのつながりの中でなされなければならない。学校の教員たちが地域学習のテキストを編集するとき、市町村史はどれほど役立てられているのだろうか。本ができあがってからでは遅い。できあがった分厚い自治体史を読んで、それを教材にしていくには多くの時間と、一定の訓練が求められる。自治体史の編纂現場では日常的に「もの資料」や文書に触れているのだから、教室で利用できそうな情報を絶えず提供していくべきではないか。編纂の段階から、教育現場と連携し、教材開発・副読本の作成に積極的に発言してよいのではないかと思う。

この点は、自治体史の編纂があっても無くても、終わっていても、それに拘わらず文書館の役目でもあると思う。文書館は自らの有用性を広く示し、利用を開拓していく積極的な姿勢がなければならない。見たい人はどうぞ館に来て見て下さいといった、いわば待ちの姿勢を感じるのは私だけだろうか。市民感覚の中で文書館の存在意義を獲得していくにはまだ距離があるように思う。

文書館が市民に向けて行う教育・普及活動の一つに古文書解読講座がある。重要な仕事だと思うが、単なる文字読みのテクニックに終ってはいないか。史料の解読とは、まず文書論・史料保存学であって、その上で、読んだ文字から過去を再構成していく思考の訓練だと思う。ならば、読めない文字で苦労させるよりも、誰もが読める素材から始めてもいいのではないか。非現用からアーカイブズと

なった行政文書を使って、それが歴史を解明する格好の素材であるということを、文書館自身が証明してみせることが今求められている。古文書でも行政文書でも、それがどうすれば歴史の史料になるのかが、一般には解らないのである。この単純で簡単な作業と、思考方法の訓練に、文書館側からも手を差しのべてもらいたい。

研究者にとって、史料から叙述していくことは常識だが、その活字だけを読まされている市民には、この点が実感できない。市民が地域の歴史を調べたいと思ったとき、まずは図書館へ行くのが普通になっている。本で調べて解らないことは、「わからない」のである。そこで、書物と史料を結び付ける橋渡し役が必要になってくる。活字を読むのと同時に、その記述の基になった史料を併せ読んでみる体験が重要になる。本に書かれていないことが史料からわかったり、本の記述よりもより詳細な内容が史料を読んで解った、という体験をしたとき、史料解読への熱意は高まるだけでなく、史料から歴史が叙述されているという当たり前のことも、真の意味で理解できるのだと思う。その際のテキストには、自治体史が最適である。土地勘のある住民が市町村史を読みながら、同時に地域に根ざした史料に辿りつけるからである。

刊行された自治体史の成果をどのような形で地域住民に還元していくべきか、この点の議論は少ない。編纂事業は、刊行後のアフターケアも視野に入れなければならない。平易に叙述してある(筈な)ので、後はご自由に読んで下さい、ということではいけない。自治体史が書棚の飾りものにならないためには、それをじっくり読み込んでいける場が必要である。個人では難しすぎる。読書会があるといい⁹⁾。折角、地域の史料を使い込んで編まれた自治体史ならば、それを有効に使って、住民が史料に親しみをもてるようにする、あるいは、そうした意識を喚起する契機と材料にすべきではないかと思う。

文書館には、これまで図書館の郷土資料室

が担ってきた機能が欠かせない。文書館専門職員は、史料知識のみならず、それを加工した図書への目配りも必要である。少なくとも自館所蔵の史料が、地域の自治体史の中でどのように利用され、記述されているのかは、掌握されていることと思う。司書の方には図書から史料への橋渡ししが難しいにしても、文書館専門職員なら容易い話だ。市民が地域の歴史を調べたいと思ったとき、まずは文書館へ行ってみよう、という流れを作り出す必要がある。図書を読んで「調べる」という段階から、史料から考えようという動きになったとき、その姿勢は地域史の研究そのものではないか。

おわりに

歴史の研究者は、文書のしみも皺も、紙魚も文書蔵のにおいも知っている。文書館専門職員はそれ以上によく知っている。そこで暮らしていると言って誤りない。しかし、文書に囲まれた生活をしていると、周りもみな、そうであるかのような錯覚に陥りやすいものではないか。

写真版を使ってくずし字を教えながら、学生を未整理の古文書調査にかり出すことがある。鼠の糞と紙魚、そして埃まみれの作業が、それまでの「日本史」の勉強とあまりにもかけ離れていることに愕然とする。活字になった細かな歴史事実を覚えることに長けた学生は、その鈍くささに、「世界史」を専攻すればよかったと後悔する。しかしその反面、文書の実物に触れて、ある種の興奮を覚えるのも確かなようだ。村絵図の大きさに、美しさに目を見張る。検地帳と手紙類の紙質の差に気付き、はがれた継紙の僅かな糊代の補修に苦勞する。再生紙を使っていたのか、農民の手紙類には色々な色や質のものがある。借用証文の墨引きや、借用人の名前部分の切り取りから、返済完了に安堵する。後日、大名文書に触れる機会があれば、使われていた紙そのものに違いがあったことを実感できる。ま

た、商家の大福帳を見て、10センチを越える横帳のつくりに関心する。みな、「もの資料」としての文書の魅力に引き込まれているのである。

研究者はこの興奮を忘れてしまっている。いきおい、そこに記された文字の世界に入り込んでしまう。しかし、もの資料として文書を見る視点、文書のもつ質感、風合いも実は大事な要素なのだと思う。特に、これから古文書の勉強に取りかかろうとする人には、そこに書かれている中身もさることながら、それ以上に、和紙の肌触り、その感触に強い印象を受けるのではないだろうか。市民講座の参加者がそう教えてくれる。

文書館は紙の博物館である。古いものから近現代に至るまで、あらゆる紙が揃っている。しかもそれは、切ったり継いだり、文字を書いたり、時には色まで着けて、人間がある目的に使ったものばかりである。そこに記された文字の世界に入り込む前に、じっくりその紙を見つめるゆとりが大切である。ガラス越しには解らない紙の質感に触れる大切さである⁹⁾。文書館は、完全形の文書だけを収蔵すればよいというものではない。襖の裏張りや煙草の巻紙など、文字を記して最初の役割を終えた後に別の用途に使われたり、あるいは、焼却処分の火中から救出されて半分だけ焼け残った帳面、水につかってカビが生え板になってしまった帳面なども保存しなければならない。そして、そういう紙の一生もあるということ、市民に伝えるべきだと思う。そういう中から自然に、史料保存の芽が育っていくのではないか。市民の内面には、文書への強い関心がある。その関心をうまく引き出し、育てていくことも文書館に課せられた大切な責務だと思う。

〔註〕

- 1) 太田富康「市町村文書館の必要性とその役割—「民間史料」保存へのアプローチを中心に」(『浦和市史研究』7号)には、示

唆に富み傾聴すべき多くの論点が示されている。

- 2) 北海道大学スラブ研究センターでは、研究紀要の『スラヴ研究』を、また、国立歴史民俗博物館では展示・広報・資料・研究に関するホームページを開設し、インターネット上に公開している。徳島県では、図書館・博物館・近代美術館・文書館・21世紀館からなる文化の森総合公園が様々な情報をコンピューターに集積し、各家庭や文化施設・教育機関・市町村のパソコン端末から自由に引き出して利用できる「徳島県文化・学習情報システム (COMET)」を構築し、県のホームページからもアクセスできるようにしている。また、秋田県歴史研究者・研究団体協議会でも秋田歴研協のホームページを開設し、秋田県の歴史・考古・民俗学に関する研究動向をネット上に公開している。
- 3) 函館市史編纂室では函館市のホームページの中に、博物館などと共に情報を提供し、『地域史研究はこだて』の創刊号より22号までの目次と23号以降の本文を公開している。博物館が逐次刊行する研究報告書類も「市町村史の研究」同様、その全容を把握するのは困難な状況にある。市町村単位のホームページではなく都道府県単位で歴史資料の保存・利用機関が結集したホームページを開設できないものだろうか。
- 4) 文部省科学研究費による重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」(研究代表者:筑波大学教授岩崎宏之)では、歴史資料を電子情報化して保存すると同時に、歴史学の研究に新たな可能性を切り開く様々な試みがなされている。その動向を紹介するニューズレターは紙メディアだけでなくホームページにも公開されているし、97年度末には研究成果報告書がCD-ROM版で提供されることになっている。また、秋田県立図書館では97年度より文部省生涯学習局より社会教育施設情報化・活性化推進事業の委嘱を受け、民間に存在する古文書・写真・

民謡や昔語りなど様々な歴史情報を電子情報化して収集・保存するシステムを構築する研究に着手した。一般には、社団法人・日本画像情報マネジメント協会の『月刊IM』が、最新の興味深い情報を提供し、参考になる。

- 5) 秋田県立図書館報『けやき』175号(96年8月)、および『秋田歴研協会誌』5号(97年8月)参照。同図書館では、同史料をマイクロフィルム11本、合計5,144コマ分の形で保管していた。これから一枚のCD-Rを作成し、その複製CD-Rを貸し出すだけでなく、希望者には実費(一万円)提供している。また、考古学の分野でも群馬県安中市教育委員会では、同市中野谷松原遺跡の調査報告に関して掲載写真をメインにしたCD-ROM版を作成している。これを担当された社会教育課文化財係の大工原豊氏によれば、イギリスや中国でも既に考古学報告書類のCD-ROM化が進められておりカメラマンの著作権保護が問題になっているという。研究に関わる情報公開の方法として参考になる。
- 6) 辻川敦「地域社会における文書館事業の役割—時代のニーズ、政策的位置付け—」(『記録と史料』5号、94年9月)には、多く啓発され、本稿の起点をなしている。
- 7) 東京大学史料編纂所では84年以降、コンピュータによる歴史情報処理研究が進められ、「東京大学史料編纂所歴史情報処理システムSHIPS」のもとに、所蔵史料目録や諸家文書目録、維新史料綱要など数々のデータベースが開発されている。また、前記註(2)にあげた「徳島県文化・学習情報システム」の中でも同県立文書館所蔵資料に関するデータベースが構築され、公開・利用に供されている。金原祐樹

「徳島県立文書館のデータベースシステム」(『徳島県立文書館研究紀要』創刊号、97年3月)参照。

- 8) 編纂室が企画した例に、秋田県本荘市の「市史を読む会」がある。また、住民主催のものに茨城県久慈郡大子町の大子郷土史の会による『大子町史通史編』の輪読会(崙書房97年7月刊の『常総の歴史』19号に収録の野内正美「ある町立文書館への模索」参照)や、長野県飯山市常盤地区で開かれている『飯山市史』の勉強会・常盤塾などがある。同地区では旧常盤村が飯山市に合併する記念事業として『村史ときわ』が刊行され、その際にスライドにナレーションを入れた『村史』のダイジェスト版も作られた。これを使った勉強会が行われ、『村史』の理解に役立てられた。常盤塾はそれ以来の伝統を持ち、同地域で『村史』から『市史』まで一貫して指導的役割を果たされた元茨城大学教授・故河内八郎氏の功績が大きい。
- 9) 堀越宏一「フランスにおける文書館の利用と歴史研究」(『歴史評論』567号、97年7月)によれば、「フランスの文書館は、地域の歴史教育の場として、小中学生の課外学習や所蔵史料の一般公開など大変熱心であるようだ。しかし、その反面で、すべてが一点しか存在しない古文書の保存のために、閲覧禁止措置の必要が出てくるのは、複雑な問題である。」と、利用と保存の矛盾について紹介されている。しかし、それでもなお日本の現状では、なし得る対策を講じながら、市民が文書に親しみを感じるこののできる場の提供が必要だと考える。
- 附記、本稿は全史料協96年度大会で報告した内容を基に、当日の討論と、その後の調査により加筆したものである。